

特別講演

主催 埼玉医科大学 総合医療センター 形成外科学教室,

後援 埼玉医科大学 卒後教育委員会

平成20年3月25日 於 埼玉医科大学 川越ビル 6階 大会議室

チェチェン紛争下での戦傷外科医としての経験と 戦後のチェチェン情勢

ハッサン バイエフ

(チェチェンの子供達国際委員会議長)

今回、先ず研修先であるこの埼玉医科大学で講演の機会が与えられたことに、感謝申し上げたい。私ことハッサン・バイエフは、チェチェンのみならず周辺諸国で唯一の美容形成外科医として恵まれた人生を歩んでいた。しかし、第1次チェチェン戦争、さらに第2次チェチェン戦争によって根底から覆されてしまった。私が体験したこの戦争については、まずチェチェンという国と、その歴史から説明する必要がある。

チェチェン共和国は、ロシアと中東の境界にそびえるコーカサス山脈の北麓に位置する小国である。面積は米国のコネチカット州とほぼ同大、日本ではここ埼玉、それと近隣の群馬県、栃木県をあわせたくらいの国土面積である。この、ロシアと中東—キリスト世界とイスラム世界の境界に存在するという地理的要因から、チェチェンでは古くからロシア民族・文化とは異なる民族性・文化を持ち、そのため16世紀の帝政ロシア時代から、コーカサス征服を図るロシア軍隊を撃退し、以来自国・民族の独立自治を求めてロシア・ソビエトと対立を続けてきた。

よってその人々—我がチェチェン民族は、先祖から伝わる武勇伝や立志伝を次世代に伝え、幼少より独立心と格闘技で頑強な肉体を得ることを奨励してきた。

私もその例にもれず、幼少時代から柔道、サンボなどの格闘技に親しみ、高校時代には全ソビエト連邦の競技会で良い成績を修めるまでになっていたが、そのままスポーツ選手、あるいは指導者として名を成すよりも、何らかの他の特殊技能を身につけ、それを以って早く社会、家族に貢献したいと考えるようになり、遠くシベリアはクラスノヤルスクで医科大学に入学し、スポーツ・勉学を両立して歯科外科医となった。

その後故郷のチェチェンおよびモスクワで形成美容外科医として働き、医学的にも経済的にも成功を収め

ていたが、1994年12月に始まり96年8月まで続いた第1次ロシア—チェチェン戦争、また束の間の停戦時期を経て1999年8月から再び勃発した第2次ロシア—チェチェン戦争で、それまでの経歴や財産を投げ打って、戦傷外科医として戦火の中、医療活動が続けることを余儀なくされた。

第一次戦争時には、首都グロズヌイの病院から故郷に戻り、そこで治療器材や医薬品を持ちこんで病院を作り、戦傷外科医としてあらゆる負傷者—一般市民からチェチェン兵、あるいは敵側のロシア兵まで—を治療した。停戦時には残された負傷者の治療を続けながら、また美容形成外科医としての仕事も徐々に再開した。しかし平和な期間は短く、更なる地域の政情悪化から、第2次戦争に至った際には、またあの第一次戦争のような地獄の活動をするのかと心中恐怖で満たされたが、何人に対しても自らの力の及ぶ限り助け救わんとするヒポクラテスの誓いに忠誠を全うすべきと考え、他の選択—故郷や家族、友人を捨てて国外へ逃げる方法は選べなかった。

私は父から、イスラム教におけるアッラーの信仰、家族の大切さ、肉体を常に健康に保つことの重要性について厳しく教えこまれ、このことが、先の戦争で幾度も命を落とす危険に遭いながらも生き延び得たことにつながったと考えている。また戦争中、そして亡命にいたるまで、死の一步手前で何度も助かったこと、悪状況のなか信頼できる人々が現れてくれたのも、アッラーのご加護があったことに加え、信念を貫き、治療にベストを尽くし決して妥協しなかったことが報われたのだと思う。第2次戦争は1次戦争以上に凄惨を極めた。ロシア軍は浄化作戦という名の壊滅作戦を各市街、各集落で徹底的に行い、その上で住民を、戦闘員と区別するという名目で強制収用所に送り

込んだ。日を追うごとに死者、負傷者が増加し、医薬品や物資も途絶え、私が負傷者にできることは負傷した四肢を切断し、出血を止め、できるだけの栄養を与え、砲撃から守り、あとは祈るだけであった。一時は病院に300人以上の負傷者が運ばれ、私は最大で48時間に67件の四肢切断術と、7件の脳外科手術、そして数え切れないほどの外科処置を行った。しかし戦傷者は絶えず、自身の危険や体力の限界を感じる中、更にはヒポクラテスの誓いを守るべく、平等に行ってきた医療行為が、ロシア政府、そして味方であるはずのチェチェン独立派からも裏切り者、ならず者として私を糾弾する要因となり、双方から私の逮捕命令が下るという結果となった。私は、あるロシア連邦保安局員の個人的かつ人道的な計らいで、間一髪でモスクワからアメリカ合衆国に国外脱出することができた。その後は、合衆国で自身の経歴やチェチェンの内情を語る講演などを各都市・各地方で行い、同国人権団体「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」から人権監視者として表彰され、自身と、家族縁者の政治亡命を果たし、現在同国に在住している。

2001年9月11日に起こった米国同時多発テロ事件、また2002年10月24日に起こったモスクワ劇場占拠事件は、イスラム教徒の多い我々チェチェン人が、テロリストであるという印象を世界に与える新たな要因となってしまったが、その一方で、戦争を通じてチェチェン国民はその4分の1、約25万人が殺害され、戦後の生き残った人々の多くが、家族肉親の喪失、貧困、難民としての生活、そしてありとあらゆる後遺症に苦しんでいる。

成人、幼少児の義足、義手は不足しているし、戦後生まれてきた子供たちの先天性障害一口唇口蓋裂、四肢や顔面、その他の臓器奇形も戦前の30－40倍の発症率となっている。

私はこの状況に少しでも報いるべく、自国での医療活動を、少しずつだが初めている。

ここにお集まりの皆さんの中からも、もし私の考えに賛同して頂けたら、遠い自国での医療援助に協力して欲しいと願う。

(文責 塩川一郎)